
第9回
子どもの遊び場

10月27日（日）10:00～16:00
青年文化センター エッグホール



【報告】

I. 海岸公園冒険広場の被災と震災後の遊び場作り

NPO 法人冒険あそび場-せんだい・みやぎネットワーク
冒険あそび場プレーリーダー 岩渕健史

II. 子どもが熱中する遊びを体験

こどもとあゆむネットワーク 阿部俊昭

III. 子どもの笑顔を取りもどす活動

こどもとあゆむネットワーク代表 横田重俊

【報告】

I. 海岸公園冒険広場の被災と震災後の遊び場作り

NPO 法人冒険あそび場—せんだい・みやぎネットワーク

冒険あそび場プレーリーダー 岩淵 健史



仙台市の沿岸部一帯に広がる防潮林を中心とした「海岸公園」のうち、井土地区内6.9ヘクタールが「海岸公園冒険広場」として整備され、2005年7月に開園、「NPO 法人冒険あそび場—せんだい・みやぎネットワーク」と「東洋緑化(株)」が共同企業体として指定管理者となり運営を行っている。運営方針は ① 適切
なりリスク管理とハザードの除去、② 自分の責任で自由

自由に遊ぶ、③ 利用者参加による公園運営である。

2011年3月11日、海から300メートルの距離にある公園は高さ7~8メートルの津波に襲われた。幼児遊具広場、デイキャンプ場、駐車場、管理棟は浸水したが、高台にあった冒険広場は被害を免れた。来園者から再開してほしいという声が寄せられ、冒険広場再開に向けた活動を開始、2011年11月に1日のみの臨時開園にこぎつけた。駐車場も被災していたため、乗り合わせ等で400人もの来場者があった。2012年3月にも臨時開園したが、その後はまだ休園している。

震災後、避難所になっている小学校を回ってみて、私は子どもたちの様子が尋常でなくなっていると感じた。今まで果たしてきた「冒険広場」の役割を考え、震災後に新たに担うべき役割を模索し、別な場所での活動を展開することとした。2011年5月から六郷小学校校庭に毎週日曜日開催の「六郷あそび場」を開設した。六郷小学校は、発災直後避難所となり被災した東六郷小学校が間借りしている六郷中学校に隣接している被災した東六郷小学校が間借りしており、六郷中学校に隣接している場所である。

この遊び場では、子どもがやりたいことすべてを「ダメ」と言わず、どうしたらできるか大人と子どもと一緒に考えていった。当初はまだ避難所にいる子どもたちもいたので、病院に行く必要があるようなケガをさせない、カゼをひかせないように注意を払って遊びのルールを考えた。木を輪切りにしてオセロのコマを作ったり、竹を切って流しそうめんをしたり、クリスマスにはレンガと鉄板で簡易オープンを作ってカップケーキを焼いたり、正月に餅を焼いたりして楽しんだ。また松林が消失して風が強くなったため、学校の外階段下に黒板とビニールシートで風よけとした小屋を作ったところ、その中にこもるのも子どもたちに人気の遊びとなった。幼児から小学生、中学生、高校生が折に触れて一緒に遊ぶ光景が見られた。

2011年8月からは複数の場所で遊び場を展開することとした。日本冒険遊び場づくり協会に協力を要請し、工作材料や遊び道具、ボールなどを満載した「プレーカー」を導入、各遊び場で利用した。「荒井2号公園あそび場」は仮設住宅が立地する場所で開催。当初誰も公園で遊んでいなかったが、仮設住宅の人に出てきてほしい、地元の人と交流してほしいという狙いもあり、継続しているうちに子どもを間において徐々に人がつながるようになった。「上荒井公会堂あそびば・ちびひろ」では、折り紙が得意な職員に高齢者が習いに来ており、その高齢者が幼児が遊びに来たら相手をしてやったりしている。幼児の母親たちも幼稚園情報を交換し合ったり、遊び場を手伝ったりしている。また子どもが散歩に出かけると、ある高齢者の家に必ず寄って、飼っている亀を見せてもらうなど、地域にさまざまな交流が生まれている。

「ニッペリアあそび場」は、200戸の仮設住宅の敷地内、集会所のクラブハウスの前にある。仮設住宅に住む子、みなし仮設住宅に住む子、近隣に住む子など、被災状況や、通う学校が違う子どもたちが遊びに来る。クラブハウスがガラス張りということもあり、大人たちが子どもに声をかけたりしやすく、中で母子が高齢者とトランプをしたりという光景も外から見られる。六郷小学校、東六郷小学校の子どもたちも遊びに来ているが、

当初は学校が違うため同じ『場』で遊ぼうとしなかった。しかし感情的なぶつかりあいをきっかけに、へだたりなくけんかしたり、一緒に遊んだりするようになった。また、学校から帰っても同じ学校の友だちがいない子は、この遊び場で、地元の子や仮設住宅住まいの友だちを作ることができた。学校とは違う子ども集団ができ、さまざまな大人たちに出会う機会が多い遊び場である。その他「若林小あそび場」「卸町五丁目あそび場」「中野小あそび場」「七郷あそび場」、岩沼市の「里の杜あそび場」を順次開設、地域特性や子どもたちの年齢などに合わせた運営を行っている。

ある子どもが「復興って何？ 元に戻すこと？ 戻らないだろう？」と言って、地面にチョークで「復幸」と書いた。そんな希望を持って冒険あそび場を続けて行こうと思っている。

【報告】

II. 子どもが熱中する遊びを体験

こどもとあゆむネットワーク 阿部 俊昭



震災当時、私は仙台市社会福祉協議会事務局長をしており、若林区でボランティアセンターの立ち上げに携わった。当初、小学生とその親、中学生、高校生がボランティアをしたいと訪れてきたが、震災後1~2カ月経って大学生が続々と来て戦力になった。

一方で、震災で親族を亡くした子どもたちがいる。彼らに必要なのは、いつでも熱中して遊べる環境であり、それを作るのが私たちの役割だと考える。子どもの居場所というより遊び場が重要だ。

1997年仙台市が策定した「すこやか子育てプラン」を受けて「子ども未来フォーラム」が結成され、私は実行委員として活動した。「子どもセ



ンター」設立に向けたソフト事業の開発の役割も担っていた。目指したのは、子どもの視点に立ち、将来のよりよい子どもの遊び環境や望ましい子育て環境を整え、体験する場を作り出すことだった。子どもに関わる大人の人材育成・スキル習得や情報発信を行い、本物に触れる場としてのチルドレンズ・ミュージアムの構想もあった。2002年に仙台市は子どもセンターの事業中止を決定し、2006年にはこども未来フォーラム事業からも撤退、負担金交付も中止された。その後子ども未来フォーラムは市民活動として継続、「こどものまち」事業を行っている。私は現在「せんだいこども博物館を広げる会」として活動中で、震災後に発足したこどもとあゆむネットワークの活動にも参加している。



【報告】

III. 子どもの笑顔を取りもどす活動

こどもとあゆむネットワーク代表 横田 重俊



「こどもとあゆむネットワーク」は東日本大震災後の2011年4月1日に発足、被災地の保育所、幼稚園、児童館などの支援を始めた。震災直後から本を贈りたいとの申し出が多くあり、3月中に状況確認に出かけた。その後、仙台市の演劇工房10-BOXの協力を得て、一番広い部屋に本を集めて整理する場として使用することになった。全国から集まった本は7万冊にのぼる。

同年5月から避難所になっていない保育園などに配り始め、荒浜小学校、東宮城野小学校、雄勝小学校、橋浦小学校などにも届けた。訪問した学校は本棚が失われた所もあり、本を並べるため強化段ボール製の本棚を設計、石巻市桃生町の段ボール業者に200台製作してもらい、本とともに贈った。

2カ月間、本を配りながらそれぞれのニーズを聞いて回った。被災した保育所などではパソコンやコピー機など仕事をするためのインフラがまず必要、その他冷蔵庫や炊飯器、ゴザといった生活用品、そして絵本、おもちゃ、文房具などを調達して届けて歩いた。また、絵本作家・シンガーソングライターの中川ひろたか氏は物資支援とともに石巻市や亘理町の保育所などでミニコンサートを開いてくれた。絵本作家や演劇人たちがさまざまな形で支援を行った。

2012年に入って、資金集めのために手ぬぐいを制作・販売することになった。五味太郎氏、高島純氏、かこさとし氏など作家が描いた絵を仙台の染物工場に本染めしてもらったもので、合計16種類を作った。作家2人分の2本セットを2,500円で販売、半分の額を活動資金とした。また、保育士向けの活動として、子どもたちの昼寝時間を利用し、1時間弱で簡



単に作れるもののワークショップを行っている。羊毛のリース作り、水彩のにじみ絵（シュタイナー教育のアート）などで、保育士たちの気分転換になっている。

2013年8月には「日本一楽しい図書室」プロジェクトもスタート。まず石巻市の北上小学校の図書室に壁画を描くイベントを呼びかけた。飯野和好氏、長野ヒデ子氏、ささめやゆき氏など6名の絵本作家が駆けつけてくれ、壁、天井、本棚に明るく楽しい絵を描いてくれた。隣室では学生や出版社のボランティアが図書室の蔵書の整備・登録作業を行った。今後も、さまざまなジャンルの団体と連携して、子どもたちに寄り添い、顔が見える関係で共に歩いていく支援を続ける予定である。